

## 江戸女流文学とジェンダー、そして「わきまえる女」(下 a)

## - 朝鮮朝女流文学「閨房歌辞」を手掛かりとして -

丁 貴 連

## 目次

## Ⅲ. 儒教社会に挑んだ「閨房」の女性たち

## 1. 朝鮮女流文人の文筆活動とジェンダー

- (1) 近世以前の女流文学
- (2) 朝鮮時代の女流文人と文筆活動
  - 1) 女子教育と女訓書の編纂
  - 2) 女性の文筆活動への視点と女流漢詩人群の登場
  - 3) 個人文集を刊行する女性とその支援者たち
    - 朝鮮時代の女流漢詩人と出版状況
    - 江戸時代の女流漢詩人と出版状況

(前号)

## 2. 女流詩文集の刊行ブームと男性知識人の欲望

## (1) 女性の公開的な文筆活動とジェンダー規範

これまで見てきたように、「儒教の国」朝鮮では女性、とりわけ士大夫家女性が漢文で文筆活動するのは婦徳の名で禁じられていた。

ところが、18世紀頃から士大夫家女性の間で漢文による文筆活動が活発化し、その成果を公開する女性たちが増え始める。以下は、朝鮮時代(1392～1910)に出版された女流詩文集15種(12人)を年代別にリストアップしたものである<sup>1</sup>。

17世紀: 許蘭雪軒『蘭雪軒集』(1606・1608・1692)、李梅窓『梅窓集』(1668)

18世紀: 李玉峯『玉峯集』(1704『嘉林世稿』の附録)、許蘭雪軒『蘭雪軒集』(1711和刻<sup>2</sup>)、金子念『杏堂娣姊冤稿』(1785『杏堂冤稿』の附録)、允摯堂任氏『允摯堂遺稿』(1796)

19世紀: 令壽閣徐氏『令壽閣稿』(1824『足睡堂集』の附録)、情一堂姜氏『情一堂遺稿』(1836)、朴竹西『竹西詩集』(1851)、静堂遺稿』(1858)、只在堂姜氏『只在堂稿』(1877)、李燦婦人光州金氏『菊窓先祖妃

令光州金氏逸稿』(1895)、安東張氏『貞夫人安東張氏実記』(1904)

このように、17世紀に出版された許蘭雪軒と李梅窓を除く10人(11種)の女流漢詩人の著作がすべて18世紀以降に出版されている<sup>3</sup>。1910年以降に刊行された7種<sup>4</sup>と筆写本の形態で伝えられる18種<sup>5</sup>〔内3種は1910年以降に編纂されたもの〕を加えると、約40人近い女性詩文集が18世紀後半から19世紀にかけて集中的に編纂され、出版されていたことが分かる。これは、同時期の江戸時代に出版された女流漢詩人の詩文集〔筆写本2種<sup>6</sup>を含む8種: 17世紀1種、18世紀1種、19世紀6種〕の4倍以上に相当する数である。

くり返すが、この時期の朝鮮では女性の詩文集刊行はそれ自体が儒教的イデオロギー、すなわち内外法に背く行為であった。にもかかわらず、江戸時代をはるかに上回る多くの女性詩文集が刊行できた要因として、飛躍的に発達した朝鮮後期の印刷技術の普及が挙げられている<sup>7</sup>。

しかしながら、出版文化が盛んだった江戸時代の日本では、女訓物と称される教訓書類や女子節用集、往来物など、婦女子を対象とした各種教育用書物<sup>8</sup>が盛んに刊行されていたのに対し、女性漢詩人による著作が出版されることはめったに無かった<sup>9</sup>。この点を考慮すると、女性の文集刊行を出版だけに求めるのは、無理があるように思う。

その背景として、幕藩体制の基礎が確立する17世紀後半以降の日本では、社会全般に文字学習の必要性が高まり、男性と同じく女性にも教養と知識を身に付けることが求められる一方、知識があってもそれを人に披露したり、社会的に発揮したりすることはよいことではなく、女性はさまざまな知識を持ちながら、それを表に出さないようにするのが望ましいと考えられていたからである<sup>10</sup>。

つまり、江戸時代の女性たちは、教養は必要だが、身に付けた知識を決して社会的に公表するべきではないと教え込まれていたのである。その規範を破って出版を試みた『独考』（1817）の著者只野真葛が、添削と版行を依頼した滝沢馬琴から痛烈な批判を受け、沈黙させられたのは前号で指摘したとおりである。このエピソードは、江戸時代の女性にとって公開的な文筆活動が如何に大きな困難な行為であったかを如実に物語っている。

ところが、江戸時代と違って同時期の朝鮮では、女性の公開的な文筆活動に対し何らの制限を加えるどころか、女性の文集刊行や文筆教育、芸術活動は当然であり、望ましいこととされていた。以下は18世紀後半から19世紀前半にかけて登場した女性芸術家のうち漢文を駆使して自らの声を記録として残した女性たちの文筆活動をピックアップしたものである。

閨房女性の詩文が印刷され、詩会も各種の記録に登場するようになる。夫の師を務める女性が登場し、経済破綻の状況のもと妻の詩文集を刊行する夫が登場するかと思えば、全羅道南原には初夜を漢詩の掛け合いで過ごした新郎新婦の記録も登場する。また、「女性性理学者」が登場するようにもなった。

18世紀後半の資料では、敢えて「門閥も財産も考慮せず、文芸と文学に優れた才能の持ち主」を結婚相手に選び、百花堂という草堂を建てて芸術家として暮らしたという夫や、「機織りや針仕事をまったく見向きもしない」文学だけに専念した李氏夫人と、その彼女の文学を慕う中人身分の女性が、身分を越えた交遊をしたのとの話も伝えられている。そうかと思えば、士大夫の閨房の外では、小室らが文学同人活動を公開して行い（三湖亭詩社）、同僚の著作に題跋を寄せる同人的批評活動が女性の間で流行ったりもした。「旅行家」の面目を見せた小室女性は、自身の経験した旅行が広範囲に及ぶことを誇示する『湖東西洛記』と題する旅行記も残している。「浪漫的な恋人」の姿をしたある女性の肖像も登場する<sup>11</sup>。

女性の芸術行為を婦徳の名で禁じられていた当時、多くの女性は何らの制限を受けず自由に文筆

活動が行われていたということは、女性の公開的な文筆活動を抵抗感なく受容する社会的空気がある程度形成されていたことを意味する。実は、その空気を作っていたのが、京華士族<sup>12</sup>と言われた洪奭周（1774-1842）三兄弟と再従兄の洪翰周ら洪一族、そして申緯・金正喜・沈象奎・李尚迪ら文芸グループなのである。

洪奭周（1774-1842）は、領議政（現総理大臣）を務めた祖父、監察使・右副承知などを歴任した父、そして国王の次女と結婚した弟を持つ朝鮮後期を代表する門閥政治家一族の長男として、正祖と憲宗に仕えた政治家である。と同時に、彼は二人の弟、すなわち独特で個性的な奇文で洪奭周に匹敵する文名を轟かした次男の吉周と、王の婿であり朝鮮最高の蔵書家・書画・骨董の収集家で知られる三男の顯周と共に当代最高の文章家なのであった<sup>13</sup>。洪兄弟はその文名にふさわしく、自分たちの個人文集は無論、両親の詩文集や兄弟詩文集、家族詩文集、さらには豊山洪氏家門の詩文集などを次々と刊行・編纂し、豊山洪氏が文化的名門であることを国内外に広く知らしめた<sup>14</sup>。しかも、彼らは母や末弟顯周の妻〔国王正祖の娘の淑善翁主〕ら女性家族の詩文集刊行を行っただけではなく、母親の作品集は中国にまで積極的に伝播していた。

儒教を国教とした朝鮮時代は女性が漢字で文筆活動をすることに否定的な立場を取っていたことは前述の通りである。しかもその考え方は、19世紀に入っても厳然として存在し、女性家族の詩文集が刊行されるということは、たとえ国王の姻戚に当たる最上流階級の女性であっても、決して許される行為ではなかった。

ところが、その取り締まりを行なう位置にある洪一家の男性たちは、一族の女性たちの文筆活動を支援・奨励し、その公開に積極的だったのである。洪一家だけではない。洪奭周兄弟とも親交が深かった申緯（1769-1847）、金正喜（1786-1856）、李尚迪（1803-1865）たちも女性の公開的な文筆活動に対する肯定的かつ解放的な態度を取り、女性芸術家たちへの理解と支援を惜しまなかった<sup>15</sup>。

## (2) 朝鮮知識人の燕行体験と中国の江南文化

いったいなぜ洪奭周とその文芸仲間たちは、女

性の芸術活動に開放的な態度を持つようになったのか。その背景に、朝鮮後期に頻繁に行われていた燕行<sup>16</sup>体験が挙げられている<sup>17</sup>。以下は18世紀後半から19世紀にかけて北京を訪れた燕行使と彼らが交流した清朝の文人士をリストアップしたものである。

【表1】燕行使と交流した清朝の文人士たち<sup>18</sup>

| 燕行使         | 燕行年度                 | 清朝文人                        |
|-------------|----------------------|-----------------------------|
| 洪大容         | 1765                 | 嚴誠・潘廷筠・陸飛                   |
| 柳漣          | 1776                 | 潘廷筠・李調元                     |
| 李德懋         | 1778                 | 潘庭筠・李調元・祝徳麟・沈心醇・唐采宇         |
| 朴斎家         | 1778・1790            | 紀昀・李調元・羅聘・孫星衍・尹秉綬・張船山       |
| 朴趾源         | 1780                 | 唐樂宇・兪世琦・陳立齋・陳廷訓・徐璜          |
| 洪仁模         | 1783                 | 方維翰・盧愷                      |
| 柳得恭         | 1790・1801            | 紀昀・羅聘・阮元・潘廷筠・孔憲培・鐵保・陳瑩      |
| 洪奭周         | 1803・1831            | 費蘭墀・韓韻海・阮常生・李璋煜・劉喜海         |
| 南公徹         | 1807                 | 褚裕人・吳思權・李林松                 |
| 金正喜         | 1809                 | 翁方綱・翁樹崑・阮元                  |
| 申緯          | 1812                 | 朱鶴年・葉志詵・劉喜海・翁方綱・葉志詵・朱鶴年・汪汝翰 |
| 沈象奎         | 1812                 | 翁方綱・李鼎元・洪占銓                 |
| 南尚教         | 1825                 | 吳思權・蔡逸・熊寶書                  |
| 朴思浩         | 1828・1837            | 吳崇梁・黃爵滋・丁泰                  |
| 李尚迪<br>(訳官) | 1829～1864<br>(12回派遣) | 陳文述・張耀孫など                   |

確かに洪奭周兄弟は無論、金正喜、申緯、沈象奎などその文芸仲間たちは、いずれも燕行を体験している。中でも、洪一家は祖父（洪樂性、1783、正使）以後、父（洪仁模 1783、父の随員）、息子の洪奭周（1803 書状官・1831 正使）に至るまで3代が燕行使に任命されて北京を訪れている<sup>19</sup>。官職に就いていない人にとっては夢のような燕行を、洪一家の男性陣は3代に渡って派遣される栄光を享受したのである。その中でも、長男の洪奭周は1回行くだけでも難しいと言われた燕行を2回も経験し、その際に交誼を結んだ清朝の文人士とは生涯に渡って交流を続けた<sup>20</sup>。一方、国王の駙馬という立場のために燕行の機会を得られなかった三男の洪顯周は、兄をはじめ燕行に行く知人たちを積極的に活用して当代中国文壇の文人画家と幅広い神交を結び、その人脈を使って北京文壇の最新文化を入手し、それを朝鮮

文壇と共有した。また、洪顯周自身だけではなく、兄弟や家門の詩文集を中国に伝播する過程で、独自の対清交流網を構築し、19世紀の中朝学術交流に寄与するところが大きい<sup>21</sup>。

朴茂瑛は、80余年に渡るこの豊富な中国経験こそ、洪一家の男性たちが女性の芸術活動に対して開放的な態度を取るようになった要因にはかならないと、次のような興味深い指摘を行なっている。

燕行の体験が朝鮮女性の文筆活動と関連してどのような痕跡を残していたのかについて語る資料は現在残されていない。しかし少なくとも、三代に亘った燕行の体験は女性芸術家に対する清朝の文人士たちの態度にたいそう慣れさせたことだけは相違ないだろう<sup>22</sup>。（下線は筆者）

【表1】が示しているように、1765年洪大容の燕行以降、清朝文人と交流する燕行使が急増したが、実態は一回性の交流で終わったものが多い。洪奭周一家のように、祖父の燕行以来、80余年間〔洪一族の燕行体験は7代祖洪柱元（1647・1649・1653・1661）にまで遡ることができる〕に渡って中国と持続的に交流した例は他に見られない。これは、洪一族が直・間接的に北京文壇の最新知識に常に露出されていたことを意味する。ここでは洪奭周一家が入手し、朝鮮文壇と共有した中国の最新文化の詳細について論じる余裕はないが、母親の詩文集を刊行し中国にまで伝播していた洪奭周兄弟ならではの関心事の一つを記しておかねばならないことがある。

それは燕行先の北京で遭遇した清朝文人の多くが、家族内の女性の芸術行為を公開的に認め、その活動を積極的に支援し、何よりも女性の才能を認めていたことだ。清朝文人のこのような態度は、明末以後江南〔江蘇省、浙江省、安徽省一帯〕地方を中心に形成された女性芸術家に対する新しい態度を反映したものである<sup>23</sup>。

以下の文は、20世紀中国の著名な史学者である陳寅恪（1890-1969）が、明末清初の代表的な女流文人であり、錢謙益（1582-1664）の妻であった柳如是（1618-1664）の生涯を扱った著作の中で、この時期の江南で活躍していた女性芸術家の文筆活動の様子を紹介したものである。

河東君（柳如是：筆者）と同時代の著名な女性たちは、みな詩が作れ、書画も上手い。彼女たちは呉越黨社の立派な士大夫たちと交遊し、彼らとは男女の情と師友の交誼を兼ねていた。それに関する記録は広く知られており、今でもなお人々の間で楽しく膾炙されている。その理由を推測すると、この女性たちは天賦の才能を持っているだけでなく、心を無にして一所懸命に学んでいたからである。また、彼女たちは閨房に閉じ込めることもなく、礼法の拘束をも受けずに、悠々と当時の名士たちと往来し、その影響を受けていたからである<sup>24</sup>。

（下線は筆者）

このように、17世紀の中国、とりわけ江南では男女がジェンダーの区別や排除をすることなく、持てる才能のままに自由に活動する社会的雰囲気形成されていたのである。

周知の如く、中国でも伝統的に「女には学問はいらぬ」ということが当然のこととされ、むしろ学才をもたないことが女の徳とされていた（婦人無才便是徳）。しかし近世に入ると、女性の作家人口が急増し始める。胡文楷が編纂した『歴代婦女著作考』によれば、漢魏六朝から明代まで1冊以上の著作を残した女性が約367名〔漢魏六朝共33人・唐五代22人・宋遼46人・元代16人・明代近250人〕に対し、清代には3660余名に上っている<sup>25</sup>。女性による著作が10倍以上も増えたということは、それだけ女性の文筆活動に対する社会的雰囲気がオープンだったということになるが、その現象が特に顕著に顕れた地域が江蘇省と浙江省だったのである<sup>26</sup>。

その江南出身の代表的な文人の1人として名高い袁枚（1716-1797）は、女流詩人の育成に積極的だった。女弟子を集めて2度に渡って大詩会を開き、その光景を描かせた「隋園女弟子湖樓請業図」と題する絵が流通されたりするなど、袁枚の女弟子の存在は社会的に大きな注目を集めた<sup>27</sup>。中でも晩年の1796年に出版された『隋園女弟子詩選』（席佩蘭・孫雲鳳・金逸など女弟子28名の詩を集録）は中国のみならず江戸時代の日本や朝鮮でも大きな反響を巻き起こし、両国の知識人の間で話題となった<sup>28</sup>。

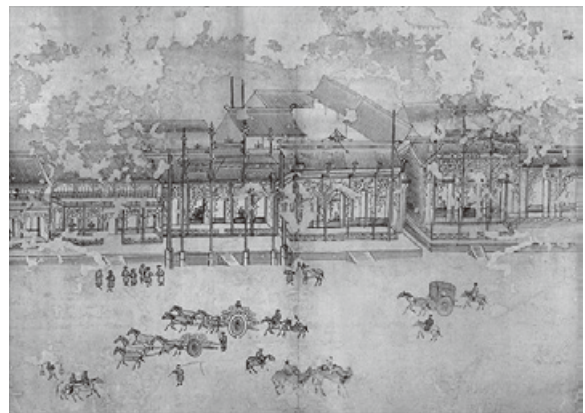
この詩集に刺激された江湘社の大窪詩仏は、1830年に『隋園女弟子詩選』を抄録・和刻した『隋園の女弟子詩選選』を出版し、友人の頼山陽に贈っ

ている。山陽はこの詩文集を、「此節、江戸より詩仏、新板随園女弟子詩選々と申もの贈越候。丁度貴処に有てよろしきもの故、呈上候<sup>29</sup>」（天保元年12月21日付江馬細香宛頼山陽書簡）と書いた書簡と共に、女弟子江馬細香に贈って詩集の出版を勧めた。がしかし、細香は「女の身としては僭越にすぎる<sup>30</sup>」と、その提案を断っていたのは前号で指摘した通りである。

袁枚の『隋園女弟子詩選』を契機に、菊地五山や大窪詩仏、頼山陽など江戸後期を代表する男性文人の間に女流詩人とその作品への関心が高まったが<sup>31</sup>、同様の動きはすでに朝鮮でも起きていた。その担い手たちが、18世紀後半から19世紀にかけて北京を訪れた燕行使、とりわけ進歩的な知識人として知られる北学派グループと北京文壇の最新情報の入手に積極的だった京華士族である。

### (3) 清朝文人と学術交流、そして女性芸術家たち

洪大容をはじめとする北学派文士と洪奭周兄弟を中心とする京華士族の文芸グループは、当代朝鮮文壇を代表する一流の学者文人らしく、燕行の目的を書籍（書画・金石なども）購入と清朝文士との交流を挙げていた。そのために、燕行使たちは2か月余りの北京滞在中は書籍の宝庫として知られる瑠璃廠〔筆・墨・硯・紙の文房四宝と印章、書画骨董を販売する店が立ち並ぶ文人墨客の街<sup>32</sup>〕に出かけて必要な書籍を買い漁る傍ら、清朝の文人学者たちとの交流に多くの時間を費やした<sup>33</sup>。



【図1】『燕行図』の「瑠璃廠」（第13幅）  
（崇実大学校韓国基督教博物館所蔵、1780年以後、火災で焼失されたのち復元された瑠璃廠の様子を描いたものと推定される<sup>34</sup>）

1812年に燕行した申緯は、中国の名勝を遊覧するよりは名士たちとの出会いと交遊したことを誇りに思うほど、清朝の文人たちとの交流を燕行の最優先課題にしていた。それだけ彼らから獲たる新知識が多かったことを意味するが<sup>35</sup>、実際に申緯をはじめとする燕行使たちが直接交流していた代表的な清朝文人を【表1】から以下にリストアップしてみると、乾隆・嘉慶年間の中国の学問芸術界に綺羅星の如く並ぶ碩学と芸術家ぞろいである。

紀昀(1724-1805)、翁方綱(1733-1818)、羅聘(1733-99)、李調元(1734-1803)、洪亮吉(1746-1809)、孫星衍(1753-1818)、尹秉綬(1754-1815)、孔憲培(1756-1793)、朱鶴年(1760-1844)、阮元(1764-1849)、吳崇梁(1766-1834)、陳文述(1771-1843)、張耀孫(1808-1863)など。

朝鮮の燕行使たちは、四庫全書の総纂官だった紀昀、鬼図で知られた羅聘、紀昀の下で四庫全書纂集や文淵閣校理官などを歴任した翁方綱、地理学に精しく経史の注疏・説文に通じて篆書に巧みだった洪亮吉<sup>36</sup>、袁枚の「隋園女弟子」に倣って門下に数多くの女弟子を抱え『碧城仙館女弟子詩』という詩集を出版した陳文述などと積極的に交遊し、中には帰国後も書簡と詩文で交流を続け、北京文壇の最新動向を入手して朝鮮文壇と共有した。彼らから獲たる新知識が朝鮮の学問芸術に大きな刺激を与えたことは周知の事実である。とりわけ、1765年に燕行した洪大容と中国知識人との交流に憧れ、燕行の旅に出た朴趾源、李徳懋、朴齋家らが帰国後北学派と呼ばれた一グループを形成し、「朝鮮に新風をもたらしこの国の歴史を大きく動かした<sup>37</sup>」ことはいくら強調しても過ぎることではない。

しかし、朴茂瑛がいみじくも指摘しているように、燕行によってもたらされた新しい知識は学問や思想、芸術だけではない。女性の公開的な芸術活動に対する清朝の男性知識人たちの開放的な態度をも新しい知識の一部として朝鮮社会に提供されたのである。その最初の紹介者が1765年に燕行した洪大容(1731-1783)である。

1766年5月2日、北京から帰国した洪大容は、自身の燕行体験を弟子や友人知人たちと共有するために『乾浄衛会友録』(1766年6月15日、私家本、

全3巻のうち第1巻と第3巻は流失<sup>38</sup>)を纏めたのを皮切りに、『乾浄衛筆談』(1767年～72年の間に編集、全2巻、『乾浄衛会友録』の改訂版<sup>39</sup>)、燕行録『湛軒燕記』、『杭伝尺牘』、ハンゲル本『乙丙燕行録』など燕行関連の作品を次々と書きあげた。これらの燕行録はソウルを中心とする知識人の中で広く読まれた。特に、杭州出身の嚴誠、潘廷筠、陸飛ら3人の中国知識人と北京で交わした筆談記録である『乾浄衛会友録』は「朝鮮燕行使のあり方、なかでも学术交流に大きな変化<sup>40</sup>」をもたらした画期的な燕行録として、同時代の鋭敏な青年たちに大きな衝撃を与えた。

1778年に燕行した李徳懋がその一人である。彼は『乾浄衛会友録』に共鳴したあまりに、わざわざ『天崖知己書』(1767年)と名付けた読書ノートを作ってまで洪大容の燕行を追体験しようとした。それほど『乾浄衛会友録』には心を揺さぶられるエピソードが多く含まれていたのである。とりわけ、李徳懋の関心を強く引いたのは女性芸術家に対する潘廷筠の態度である。徳懋はこのエピソードがよほど気になったらしく『天崖知己書』の他に、『雅亭遺稿』(1767-77年)、『清脾録』(1778年)などで繰り返して紹介している。中でも、洪大容と潘廷筠が初めて会った時の様子を取り上げた『清脾録』は注目に値する。

潘庭筠とは、(中略)金養虚(在行、筆者註)、洪湛軒(大容、筆者註)が燕京に行った時に知り合って親交を結んだ。彼の妻湘夫人も詩が上手で、『舊月楼集』という詩文集がある。潘庭筠は、それを取り出して一行に見せようとした。しかしながら、洪大容は嚴肅な士大夫なので詩の話をするのを好まなかった。しかも、彼は婦人が詩を作れるということは必ずしも美しいことではないと思っていた。がっかりした潘庭筠は詩集の紹介を取りやめ、金養虚に「あなたは貴国の金尚憲をご存じですか」と尋ねた<sup>41</sup>。(下線は筆者)

当時、潘廷筠は会試〔省レベルで行われる郷試に合格した挙人が受ける科挙試験〕を受けるために北京に滞在中の身であった。ふとした偶然から「天崖知己」を得た洪大容が、潘廷筠と筆談を交わすために彼が泊っている宿を訪れたのは1766年2月3日である。

つまり、この日2人は初対面であったが、潘廷筠はその席で洪大容に対し、持っていた妻の詩集を取り出して見せようとしたのである。詩が作れる妻を自慢したくて仕方がない潘廷筠の「軽薄」な態度に当惑した洪大容は、婦人が詩を作れるということは必ずしも美しいことではないと不快感を露にし、湘夫人の詩集を見ようとしなかった。がっかりした潘廷筠は妻の詩集を紹介するのを諦めて話題を変えたが、潘廷筠の態度に不快な思いをしたのは洪大容だけではない。

女性の文筆活動を禁じるジェンダー規範が厳然と存在し、女性の婦徳が家門の名誉に直結する時代だった当時、正統派知識人は無論、進歩派知識人にとっても、その妻が詩を作れるというのでのろけたくて仕方がない潘廷筠の態度は不慣れで不快な経験にほかならなかった。

しかしながら、清朝文人たちとの個人的な交流を持ち続ける燕行使が増えていくにつれ、当初不快に思われた彼らの態度は肯定的な好奇心へと変わり、やがて馴染みの経験となっていった。『乾淨衛会友録』を読んで潘廷筠の態度に好奇心を抱いた李徳懋は、燕行に出かける1年前の1777年秋頃、洪大容が決して見ようとしなかった湘夫人の詩集を送ってほしいと、潘廷筠宛に以下のような手紙を送っていたのである。

湛軒（洪大容、筆者）を通じて潘先生の湘夫人が『舊月楼』という詩集を持っていると聞いております。閨房で詩が詠まれるということは真に珍しく楽しいことであります。桐城の方夫人や会稽の徐昭華と比べて湘夫人の詩の品格はどんなものでしょうか？出版されているようであれば、一冊お送りいただけると幸いです。永遠の宝物にさせていただきますと存じます<sup>42</sup>。（下線は筆者）

錢香樹先生の大夫人陳氏の畫法は、元明以後誰と比較ができるでしょうか？趙文淑とどちらが上手でしょうか？<sup>43</sup>

湘夫人の詩集を「永遠の宝物（留為永寶）」にしたいとは聊かオーバーな気がするが、明末清初に活躍した桐城の方孟式・方維儀姉妹と会稽の徐昭華〔毛奇齡の女弟子〕を取り上げているところを見ると、

李徳懋は中国の女性芸術家の存在とその活動についての知識をすでに多く持っていたことが分かる。陳氏夫人の畫法について質問した2番目の手紙も、清朝の女性芸術家たちの文筆活動に対する李徳懋の識見と理解の高さを物語っていると言えよう。

前号で指摘したように、李徳懋は進歩的な知識人らしく、男子と同じく女子にも基本的な教育を受けさせるべきだと主張した。その一方、1775年に執筆した『士小節』の「婦義」編では、士大夫家女性の公開的文筆活動はその自体が婦徳イデオロギーに反する行為なので慎むべきだと、女性の公開的な芸術活動を警戒した。

ところが、その裏では朝鮮や中国、ベトナムの女流漢詩人の作品を読んでいたのである。その成果が、燕行(1778年3月17日～7月11日)の際に北京に持っていた『清脾録』である。本書には朝鮮や中国、日本の歴代古今の名詩と詩人に関する詩話と詩評177項目が収録されている。そのうち女性の創作に関連する7編の詩話と詩評が含まれ、しかも中国と朝鮮だけではなくベトナムの閩秀詩にまで関心を寄せていたのは注目に値する<sup>44</sup>。女性芸術家の公開的な文筆活動に対する態度に関しては、李徳懋は洪大容をすでに超えている。



【図2】羅聘筆「朴齋家肖像<sup>45</sup>」（1790年8月18日）

洪大容の高弟、朴齋家(1750-1805)も同様である。彼が洪大容と潘廷筠らとの親交に憧れ、李徳懋と共に燕行の旅に出たのは1778年である。その12年後の1790年、朴齋家は2度目の燕行の際に偶然瑠璃廠で巡り合った画家の羅聘(1733-99)と親交を結んだが、実は、羅聘も潘廷筠と同じく、初対面の朴齋家に対し、3年前に亡くなった妻、方婉儀の詩集『寒

閨吟社』を取り出して見せようとした<sup>46</sup>。

しかし、その対応はまるで違った。朴齋家は羅聘の態度に対して不快感を抱くどころか、むしろ羅聘の亡き妻のためその半格詩巻に「題詩<sup>47</sup>」を書いて彼女の死を悼んだ<sup>48</sup>。しかも、羅聘と方婉儀の芸術的同志としての夫婦関係を認め、方婉儀を独立した芸術家として、彼女の才能を讃えている。その態度からは、洪大容のように女性の「才能」を婦徳の名で断罪する態度はまったく見られない。むしろ、女性の芸術的才能をそれ自体として認める態度が見受けられるのである。

#### (4) 女性詩文集の刊行ブームと19世紀士大夫男性の欲望

李徳懋や朴齋家ら北学派知識人たちに見られる女性の公開的な文筆活動に対する態度の変化は、19世紀に入ると一層拡大されていく。【表2】が示しているように、李徳懋と舊月楼湘氏、朴齋家と方婉儀との関係が一回性で間接的なものであったのに対し、彼らの後の世代である19世紀の朝鮮文人たちと中国の女性芸術家たちとの関係は個人的で持続的、かつ直接的なものへと発展していった。その中心にいたのが、1809年と1812年に燕行した金正喜と申緯を中心とする京華士族の文芸グループである。

【表2】 燕行使が交流した清朝の夫婦芸術家<sup>49</sup>

| 朝鮮燕行使   | 清の文人 | 妻・側室・姉妹・女弟子  |
|---------|------|--|
| 洪大容・李徳懋 | 潘廷筠  | 妻：湘氏『舊月楼詩集』  |
| 朴齋家・柳得恭 | 羅聘   | 妻：方婉儀『寒閨吟社』  |
| 申緯・朴思浩  | 呉崇梁  | 妻：蔣微(琴香閣) 画家<br>側室：岳緑春『再生小草』                             |
| 申緯・洪顯周  | 陳文述  | 妻：紅蘭『断釵図』<br>女弟子『碧城仙館女弟子詩』                               |
| 金正喜・李尚迪 | 張耀孫  | 姉：孟緹『澹菊軒詩初』<br>緯青『緯青遺稿』<br>婉紉『綠槐書屋詩稿』<br>妻：包孟儀<br>側室：李紫畦 |

当時、ソウル文壇には清と国境を越えて文芸同人的關係を保つ同人グループが形成されていたが、その中でも金正喜と申緯が率いる文芸グループは、最先端のソウル文化を代表する文芸同人らしく、女性の公開的な文筆活動に対しては当時のどの文芸グループよりも開放的な態度で臨んでいた<sup>50</sup>。特に、申緯は江南文化を代表する夫婦芸術家として知られ

る呉崇梁と陳文述の夫人たちと幅広い交流を続け、男性家族の媒介を越えて直接「芸術家と芸術家」として交流するに至ったという<sup>51</sup>。

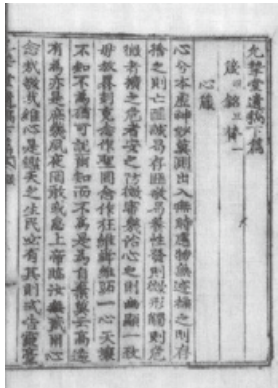
中国女性芸術家とのこのような交流は、自ずと朝鮮女性の芸術活動に対する態度の変化にも影響を与えた。その中でも、申緯は朝鮮女性の芸術活動に対し、非常に開放的な態度で接し、多くの女性芸術家と師弟関係を結んだ<sup>52</sup>。洪顯周もまた各種の詩会や雅集で小室身分の女性芸術家と頻繁に交わり<sup>53</sup>、顯周の再従兄弟洪翰周は徐箕輔の側室朴竹西の詩文集『竹西詩集』(1851)に「序」を書くなど女流漢詩人の詩作に理解を示し、その活動を支援していた<sup>54</sup>。洪家の長男、洪奭周が弟たちと母の令壽閣徐氏や妹の洪原周、末弟顯周の妻ら女性家族の詩文集刊行を積極的に行なっていただけでなく、母親の作品集を中国にまで伝播していたことは前述の通りである。

女性の公開的な芸術活動に対する士大夫男性たちの態度の変化は、当然ながら女性自身の文筆活動にも変化をもたらした。18世紀後半から自身の作品を編纂する女性たちが現れ始めたのである。「女性性理学者」と呼ばれた允摯堂任氏(1721-93)はその先駆的な存在である。彼女は65歳になった1785年、それまで書いておいた自作を編纂し、その動機と時期を「水草謄送溪上詩短引」の中で以下のように述べている。

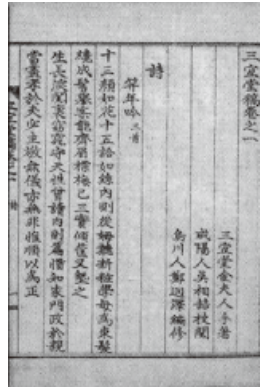
老年に達し死が迫っている。ある日突然、すべてが終わるかもしれない。草木と同じく朽ち果ててしまうのが恐ろしくなり、家事の合間に筆を取っていたらいつの間にか40編となった。首編は宋氏婦から顔子所楽論を論じたもの、8編は子供時代に書いたもの、子路編以下はすなわち中年晩年に書いたものである<sup>55</sup>。

この文章は、士大夫家女性の詩文集編集と刊印が禁忌視された当時、允摯堂という女性が自身の著作を残そうとした意思の表明という点で注目値する。しかし残念ながら、彼女の詩文集は生前中には出版されず、死後3年目の1796年、弟の任靖周によって『允摯堂遺稿』として刊行された。以後この書は、女性の性理学者になることを望んだ情一堂姜氏(1772-1832)が自分の著書で言及するなど、後代

の女性文人たちの文筆活動に大きな影響を及ぼした<sup>56</sup>。



【図3】允摯堂任氏『允摯堂遺稿<sup>57</sup>』（1796）  
韓国国立中央図書館所蔵



【図4】三宜堂金氏『三宜堂稿<sup>58</sup>』（朝鮮後期）  
高麗大学校図書館所蔵

三宜堂金氏（1769-1823）もその影響を受けた一人である。彼女は書き溜めた作品を生前『三宜堂稿』二巻（第一巻には漢詩〔総計 98 題 260 首、夫の河碓の詩 15 首を附録〕、第二巻には書 6 編〔河碓の書 4 編を附録〕と序文 7 編、祭文 3 編、雑識 6 編などを収録）に編纂し、その冒頭に載せる「自序」の中で編纂意図を次のように述べている。

日々の生活で見聞きした経験を言葉や詩で書き表し、自分なりの規範を後の世代に示すために自由に筆を走らせた<sup>59</sup>。

三宜堂金氏が生前中に自作の編纂を行っていたのは、自分の存在を「後世に示す」ためであったが、文章を通して自分の名を残そうとしたのは士族の女性だけではない。妾の娘として生まれ側室となった女性たちにもその欲望が見られる。京華士族を代表する金正喜の再従兄弟である金徳喜の側室となった金錦園（1817-87）は、20 年余りの人生を記録した著書『湖東西洛記』の末尾に、

もし、文章を書いてそれを伝えないのであれば、誰が今日の錦園がいたことを知ってくれようか<sup>60</sup>。

と、その著述意図を示している。三宜堂金氏と同じく、金錦園も自身が生きた痕跡を後世に残すために文筆活動に臨んでいたのである。その結果、筆写本を含めて 40 人近い女性が個人文集を持ち、そのうち 15 種の詩文集が刊印され、今に伝えられている。

「婦人が文集を出すのは礼法に悖る」というジェンダー規範が依然として幅を利かせていた当時、士大夫家女性を中心に王族、妓女、側室など多様な階層の女性たちが自身の詩文集を持つことができたようになった背景には、一部とはいえ 18 世紀後半頃から社会のあり方への疑問から自己主張する女性たちの登場と、その彼女たちの文筆活動に理解を示し、積極的に支援した男性知識人の存在はいくら強調してもし過ぎることはない。

中でも豊富な燕行体験を持つ京華士族が属する当代京畿地方の老論系〔朝鮮王朝時代の四大党派の一つ西人から別れた党派〕の士大夫たちは、母親や妻や嫁など女性家族の生前の文筆活動を支援し、死後は彼女たちが書き残した作品を積極的に編集し刊印した。このように編纂された刊行物が後輩の女性文人に読まれたり、中国に伝播されたりするなど、国内外に影響を与えていたことは前述の通りである。老論系京華士族だけではない。

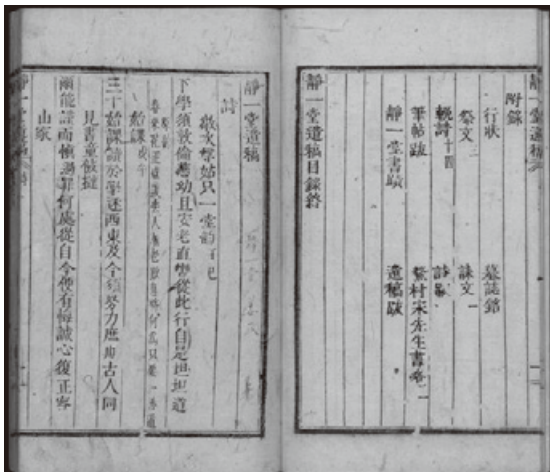
安東を中心に嶺南地方の退溪学派〔朝鮮時代の朱子学者である李滉の思想と学問を継承する学派〕の士大夫たちの間でも女性家族の詩文集刊行が活発に行われていた。ただし、老論系の京華士族たちと違って、退溪学派士大夫たちが編纂した詩文集は、そのほとんどが著者の死後数十年から数百年経って出版されたものである。とりわけ、17 世紀後半の士族の婦人である光州金氏（生没年未詳、夫の李燦 1575-1654）と安東張氏（1598-1680）の場合、詩文集が刊印されるまでそれぞれ 224 年と 240 年も掛かっている。いったいなぜ、光州金氏と安東張氏の子孫たちは死後 200 年以上経った先祖、しかも女性先祖の詩文集を刊行しようとしたのであろうか。その背景に、朝鮮後期に始まった身分制度の崩壊に伴う儒教文化の底辺化、俗化が指摘できる。

というのも、儒教の国朝鮮では両班たちにとって先祖の祠堂を建て、家門の歴史である族譜を作り、文集を刊行するということは極めて厳粛な行為なのであった。ところが、特権階級と言われた両班たちの間で行われていたこの厳粛な行為が、18 世紀後半頃から没落した家門の地位を維持する行為に転落されてしまったのである。その現象を、朝鮮後期の代表的な文翰世家と知られる豊山洪氏一族の洪翰周はその著『智水拈筆』（1863）の中で次のように指摘している。



近年、嶺南の文士たちはともすればすぐに私的な祠堂〔位牌を祀ってある部屋：筆者註〕を建てたり、文集を刊印したりする。これらをするのはすべて郷堂の先輩ともであり、世に知られたる著名な名士ではない。その計画は士大夫という名を失わないようにするということから出たものである。家勢が寒微し、朝廷の官吏として仕えることができなくなった先輩共は、その門閥を保存し、郷里に号令しながら暮らすのがもはや難しいと思った。そこで、彼らは先祖の中に少しでも勤勉で誠実な者と評されたり、「亥」と「豕」の意味が区別できる者がいたりすれば、平素書き綴った詩句と手紙などを拾い集めて出版し、それを『何某先生遺稿』と言うのであった<sup>61</sup>。(下線は筆者)

洪翰周は、文集の刊行を家門維持の手段にする風潮が下層士族層に蔓延していたことを嘆いたが、1836年に刊行された『情一堂遺稿』は、当時の文集刊行の事情を知る上で興味深い資料である。刊行者である尹光演(1778-1838)は、名門坡平尹氏の出身である。しかし、彼の家門は祖父代から官職に就けず、当代にはすでに没落していた。父代になると、兄弟が商業など経済活動に従事せねばならないほど経済的に破綻し、士族身分を維持することすらままならなかった。そんな彼が生涯をかけて取り組んだ事業が文集と先山〔祖先の墓地〕、族譜である。その中でも特に力をいれていたのが文集刊行なのである。



【図5】情一堂姜氏『情一堂遺稿』(1836<sup>62</sup>、木活字版) 奎章閣図書ソウル大学校所蔵

1832年、妻の情一堂姜氏が亡くなると、尹光演は経済的に破綻状況に置かれているにもかかわらず、彼女の詩文集刊行を強行した。彼は妻の遺稿を整理する一方、遺稿集に乗せる序文と跋文、墓誌名を老論系の文人学者に請託し、知人や友人らにも晩詩・追晩詩を依頼するなど、士大夫家女性の文集としては非常に破格的な編集をした。その結果、『情一堂遺稿』には老論学者を中心に当代一流の男性知識人たちの名が登載され、情一堂の文筆活動はたとえ間接的な方法とは言え、社会的文脈を持つようになったと朴茂瑛氏は指摘する<sup>63</sup>。

ところが、情一堂姜氏本人は「文章を書くことは婦人の仕事ではない」と生前自身の詩文を決して他人に見せようとせず、詩文そのものもすべて無くしてしまったという<sup>64</sup>。つまり、『情一堂遺稿』は著者である情一堂の意向と関係なく、あくまでも夫の尹光演によって一方的に編纂・出版されたのである。

尹光演のこのような出版行為は没落した京華士族としての現実的欲望が深く関わっている。その欲望とは、「女性性理学者」と言われた妻を動員し、文翰世家としての坡平尹氏家門の文化的伝統と社会的人脈を誇示し、それを通じて没落していく家門の地位を確報することであった。妻だけではない。尹光演は自らの欲望を実現するために、当代老論を代表する文人学者を中心に30余名の男性知識人を動員している。洪直弼、宋釋奎、李直輔、洪爽周、李宜鉉、洪翰周など『情一堂遺稿』に動員された文人学者たちは、女性詩文集の刊行が婦徳に反すると指摘しながらも、情一堂姜氏の文筆活動を認める文章を『情一堂遺稿』に寄せることによって、尹光演の欲望を叶えてあげる。

このように見てくると、18世紀後半、とりわけ19世紀に女性詩文集が多く刊行されるようになった背景には、著者である女性家族に対する純粋な個人的追悼以上に男性家族の戦略が働いていたと言える。

問題はその戦略に女性の姿が全く見えないことだが、このような男性の必要性から勧められる戦略が、時にはジェンダー言説の変化を促す力ともなり得る。女性、とりわけ士大夫家女性の芸術行為を婦徳の名で禁じていた朝鮮後期、筆写本も含めて40人近い女性の詩文集が集中的に編纂され、刊行されていたということは、その端的な証拠と言えよう。

(次号につづく)

- 1 チョ・ヨンシユク『韓国古典女性詩史』（国学資料院、2011、韓国ソウル、韓国語）、張伯偉主編『朝鮮時代女性詩文集全編（上）』（鳳凰出版社、2011、中国南京、中国語）、崔然美『朝鮮時代女性著書の編纂及び筆写刊印に関する研究』（成均館大学大学院 2000 年度博士論文、2000 年 4 月）を参照。
- 2 許蘭雪軒の漢詩集『蘭雪軒集』は、弟の許筠が亡き姉のために編纂し、1606 年に明臣の朱之蕃を介して中国に伝わった。1632 年には東萊府にて重刊され、この重刊本が 1711 年に京都文台屋治郎兵衛と儀兵衛によって開版されたのである。現在は国立公文館に『蘭雪軒詩集』として所蔵されている。
- 3 朝鮮時代に出版された女性詩文集はいずれも死後に出版されており、中には没後 200 年が過ぎてから刊行されたものもある。1704 年に出版された『玉峯集』の著者李玉峯（?-1592）は、許蘭雪軒と共に中国でも知られるなど、その詩的名声は同時代から人口に膾炙された。しかし残念ながら、玉峯はいわゆる女性的筆禍事件で夫によって家門から追い出されたがために、同時代には出版の機会を得られなかった。彼女の詩集が出版されたのは、死後 112 年後の 18 世紀である。玉峯の夫である趙瑗の玄孫趙正万が高祖・曾祖・祖父の三代の詩文を合せた『嘉林世稿』を編んだ際に、亡き父の遺志を受け継いで玉峯の遺作 32 編を付録として発刊されたからである。つまり、玉峯が家門から公開的に認められるようになったのは 18 世紀になってからである。
- 4 1910 年以降に刊行された 7 種の著者名と詩集名、そして出版年度は以下の通りである。許景蘭『景蘭集』（1913『許夫人蘭雪軒集』の附録）、鄭氏・呉氏『姑婦奇譚』（1915）、金清閑堂『清閑堂散稿』（1917）、南貞一軒『貞一軒詩集』（1919）、崔松雲堂『松雲堂集』（1922）、呉孝媛『小坡女士詩集』（1929）、金三宜堂（1769-1823）『三宜堂遺稿』（1930）。
- 5 金林碧堂『林碧堂遺集』（1683）、宋徳峰（1521-78）『徳峰集』、金冷冷（1805-53）『琴仙詩』、金盛達・李氏等『安東世稿』、金時澤編附聯珠録』、金盛達・李氏等『宇珍』、金浩然齋（1681-1722）『浩然齋集』、南意幽堂（1727-1823）『意幽堂遺稿』、権幽間堂『幽間堂言行実録』、申芙蓉堂（1732-91）『山曉閣芙蓉詩選』、金三宜堂（1769-1823）『三宜堂稿』、淑善翁主（1793-1836）『宜室堂卷』（1825）、金芙蓉（1805-53）『雲楚堂詩集』、金錦園（1817-51）『湖東西洛記』（1851）。
- 6 多田季婉（?~1776）『糸卓約集』、阿信『姫島遺稿』（1814）。
- 7 崔然美（2000）、朴茂瑛（2016）。
- 8 後藤祥子編『はじめて学ぶ日本女子文学史 古典編』ミネルヴァ書房、2003）220 頁。（教訓書類：『仮名烈女伝』『女四書』『女浪花物語』など、往来物：『女初学文章』『女用文章綱目』など）
- 9 門玲子（2006）。
- 10 桑原恵（1990）。
- 11 朴茂瑛（2016）。
- 12 ジン・ジェギョ「19 世紀京華勢族の読書文化—洪夷周家門を中心に」（『漢文学報』第 16 卷、2007）によれば、京華士族（勢族とも言う）とは、17 世紀後半に現われ 18 世紀にはその階層的アイデンティティを獲得した新しい知識人グループである。彼らは代々ソウルに暮らしながら学統・学縁・血縁でつながっていた。政治的には老論系の人々が主流をなし、郷村に居住する既存の儒学者と違い、思想的・学問的には開放的な姿勢を取った。また家学を継承することが多く、学問の関心範囲も朱子学から抜け出て次第に多様化する傾向を帯びた。
- 13 許捲洙「淵泉洪夷周の家門の文学環境と文学性向」（『漢文学報』第 15 卷、2006）。
- 14 朴茂瑛「朝鮮後期の韓・中交流とジェンダー言説の変化—『徐令壽閣』の中国搬出を中心に」（『朝鮮の女性（1392-1945）—身体、言語、心性』CUON、2016、212 頁）、許クオンス（2006）。
- 15 朴茂瑛（2016）。
- 16 夫馬進『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』（名古屋大学出版社、2015）によれば、燕行とは、朝鮮王朝の外交使節が北京に赴くことを言う。朝鮮は建国以来、中国と冊封・朝貢関係を結んで毎年使節団を派遣した。朝鮮前期には明朝の天子を拝謁するという意味で「朝天使」と呼んだが、清朝になってからは清の首都である燕京（現在の北京）を赴くという意味で「燕行使」と呼ばれた。朝鮮から派遣された使節団は明・清を通じて 2202 回（明朝 1252 回、清朝 950 回）に至り、派遣人数もそれぞれ延べ約 20 万人に上ると推定されている。使節団には三使（正史・副使・書状官）の他に訳官、軍官、子弟軍官（三使の随員）、医官、士卒、奴婢、厨子など身分の異なる様々な職業の人たちが参加していた。彼らは外交業務の他に、中国との交易、情報入手、学術交流、書籍の購入などさまざまな活動を行ない、当地で得た新しい知識を朝鮮に持ち帰った。特に、朝鮮後期になると、清朝の文人たちと学術交流を行なう燕行使が急増し、彼らを通じて北京文壇の最新の学術動向がリアルタイムで伝えられるようになった。
- 17 朴茂瑛「女性詩文集の刊行と 19 世紀京華士族の欲望—『精一堂遺稿』の刊行を中心に」（『古典文学研究』33 集、2008a）、「19 世紀中国女性芸術家の消息と朝鮮の反応」（『韓国古典文学研究』41 輯、2008b）、李ヒョンイル「朝鮮後期京華士族の理想的女性像—申韓の場合を中心に」（『韓国古典女性文学研究』第 18 輯、2009）。
- 18 藤塚輝「新潮東伝の研究—嘉慶・道光学壇と李朝の金阮堂」（国書刊行会、1975）、朴茂瑛（2008b）、林映吉「洪顯周と清朝文壇の神交とその意味」（『東方漢文学』第 87 輯、2021 年 6 月）、林映吉「紫霞申緯と清朝文壇の交遊様相—1812 年燕行以後を中心に」（『大東文化研究』第 116 集、2021 年 12 月）、金セミオ「淵泉洪夷周の燕行とその意味」（『東方漢文学』東方漢文学会、2006）。
- 19 許捲洙（2006）。
- 20 金セミオ（2006）。
- 21 林映吉（2021 年 6 月）。
- 22 朴茂瑛（2016）。
- 23 崔スキョン「明清時期女性文学資料 訳註と解釈（1）（2）」（『中国学論叢』19 輯 2003・20 輯 2006）。
- 24 陳寅恪『柳如是別傳』（三聯書店、2001）75 頁。「陳寅恪嘗謂河東君及其同時名妹、多善吟詠、工書畫、與吳越黨社勝流交遊、以て男女之情兼師友之誼、記載流傳、今古樂道、推原其故、雖由於諸人天資明慧、虚心向学所使然、但亦因其非閨屋之廢墟、無礼法之拘牽、遂得從容與一時名士往来、受其影響、有以致之也」。
- 25 胡文楷『（増訂本）歴代婦女著作考』（上海古籍出版社、2008）1206 頁。「以て著述人数而論、歴代婦女著作考中、漢魏六朝共 33 人、唐五代 22 人、宋遼 46 人、元代 16 人、明代近 250 人、清代 3660 余人」。
- 26 陳玉蘭『清代嘉道時期江南寒士詩群與閩閩詩侶研究』（人民大学出版社、2004）によれば、清代の政治の中心地

- は北京であったが、経済・文化・学問の中心地は東南以南地域、いわゆる江南と呼ばれる江蘇省、浙江省、安徽省一帯であった。特に、江蘇省と浙江省の役割は大きい。科挙試験では常に圧倒的な数の合格者を輩出し、考証学の本場でもある。『四庫全書』の編纂に選抜された学者の出身地は無論、その保管場所も7カ所のうち3カ所が江蘇省と浙江省にある。それだけではなく、女性の教育水準が高い地域としても名高い。『清代閩閩詩人徴歴』に掲載された女性作家1263名のうち江蘇省と浙江省出身が全体の80%に肉迫している。
- <sup>27</sup> 袁枚女弟子は特別な集団である。それまで女性の文筆活動は女性芸術家の家族や親族、知人を中心に行われていたが、袁枚女弟子グループは袁枚を私淑する女性詩人たちが袁枚を中心に自発的に形成された同人集団だったからである。
- <sup>28</sup> 陳玉蘭(2004) 95-96頁。
- <sup>29</sup> 徳富猪一郎・木崎愛吉・光吉元次郎・小関貴久編『頼山陽書翰集 下巻』(名著普及会、復刻初版1980) 337-338頁。
- <sup>30</sup> 門玲子『江馬細香 - 化政期の女流詩人』(藤原書店、2010) 253頁。
- <sup>31</sup> 揖斐隆『江戸漢詩選(下)』(岩波書店、2021) 474-475頁。
- <sup>32</sup> 瑠璃廠は1773年四庫全書編纂仕事が始まると同時に一層活気を帯びるようになり、書籍の宝蔵として、中国全国から出版された書籍の集荷場であり、文人学者らの交驛の場でもあった。
- <sup>33</sup> 1780年燕行した朴趾源は、同年8月に瑠璃廠緑一樓で数人の知識人と語り合っている。そのことは『熱河日記』「関内程史、八月初三日」の条に、「馭車、至楊梅書街。偶上六一樓、逢俞黃圃(世琦)少話。徐文圃(璜)・陳立齋(廷訓)在座、皆佳士。約選一会此。」とある。
- <sup>34</sup> コ・ヨンヒ、金トンジュン、鄭ミン他『韓国学、画を描く』(大学社、ソウル、韓国語、2013) 458頁。
- <sup>35</sup> 林映吉(2021)。
- <sup>36</sup> 高橋博美「通信使行から学芸の共和国へ」(『アジア遊学163 日本近世文学と朝鮮』 勉誠出版、2013) 68-71頁。
- <sup>37</sup> 夫馬進(2015) 363頁。
- <sup>38</sup> 夫馬進(2015) 365-379頁参照。
- <sup>39</sup> 夫馬進(2015) 365-379頁参照。
- <sup>40</sup> 夫馬進(2015) 557頁。
- <sup>41</sup> 李徳懋「青脾録」(『青莊館全書』 卷34。韓国文集叢刊258、民族文化推進会、49頁)。原文は以下の通りである。「潘庭筠字蘭公。一字香祖。號秋庫。乾隆壬戌生。美姿容。藻思警發。書画双雙絶。金養虚、洪湛軒遊燕。相逢定交、妻湘夫人、亦工詩。有舊月樓詩集。幾欲出示。湛軒莊士也。李不喜詩談。次以婦人能詩。為不必佳。遂憮然而止。問養虚口。君知貴国金尚憲乎。」
- <sup>42</sup> 李徳懋「雅亭遺稿」(1796年編纂)(『青莊館全書』 卷19、『韓国文集叢刊』 257、民族文化推進会、影印本) 262頁。原文は以下の通りである。「前因湛軒。聞先生賢閩湘夫人。有舊月樓集。閩庭之内。載唱載和。眞稀世之樂事。與桐城方夫人。會稽徐昭華。何如也。以有刊本。願賜一通。留為永寶。」
- <sup>43</sup> 同上(「錢香樹先生大夫人陳氏、畫法可倣。元明以来何人耶、與趙文淑孰優秀。」)。
- <sup>44</sup> 『清脾録』(『乾浄術筆談 清脾録』 上海、上海古籍出版社、2010) に掲載された女流詩人とその作品は以下の通りである。「福娘」(朝鮮)「金高城副室」(朝鮮)「雲江小室」(朝鮮)「詩妓」(朝鮮)「閩人雅正」(中国)「高麗閩人詩只一首」(朝鮮・高麗時代)「一枝紅」(朝鮮)。
- <sup>45</sup> 高橋博巳(2013) 74頁。
- <sup>46</sup> 朴斎家『貞蕤閣三集』(韓国文集叢刊261、民族文化推進会、影印本) 516頁。「兩峯出示『寒閩吟社』 卷。時方氏下世已三歳矣」。
- <sup>47</sup> 朴斎家『貞蕤閣三集』(韓国文集叢刊261、民族文化推進会、2000年) 516頁。朴斎家が書いた「題詩」は次の通りである。「寫韻仙綠垂、図詩婦教清。才應低柳絮、第本出桐城。瑣細皆名理、孤高亦性情。夜壺吟社冷、誰復念羅横。」
- <sup>48</sup> 朴斎家『貞蕤閣三集』に同じ。「為兩峯内子方氏婉儀、書其半格詩卷」。
- <sup>49</sup> 朴茂瑛(2008b)、李ヒョンイル(2009)、林映吉(2021) 参照。
- <sup>50</sup> 朴茂瑛(2016)。
- <sup>51</sup> 朴茂瑛(2008b)。
- <sup>52</sup> 金ヒョンシユク「紫霞申緯とその時代の女性と女性像」(『韓国古典女性文学研究』 6輯、韓国古典女性文学会、2003)。李ヒョンイル(2009)。
- <sup>53</sup> 朴茂瑛(2008b)。
- <sup>54</sup> 陳ジェギョ「『智水拈筆』 研究の一端 - 作家洪翰周の家門とその一生」(『漢文学報』 第12輯、2005年6月)。
- <sup>55</sup> 允摯堂任氏「水草膳送溪上時短引」(『允摯堂遺稿』 1796)。「至暮年死亡無何幾 恐一朝溘然 草木同腐 遂於家政之暇 隨隙 下筆 遽然成一大軸 總四十編 蓋自首編宋氏婦 至顔子所樂論 八編兎時時作也 子路編以下即中晚所述也」。
- <sup>56</sup> 崔然美(2000)。
- <sup>57</sup> 奎章閣韓国学研究院編著・小幡倫裕訳(2015) 90頁。
- <sup>58</sup> 奎章閣韓国学研究院編著・小幡倫裕訳(2015年) 38頁。
- <sup>59</sup> 張伯偉(2011) 19頁。
- <sup>60</sup> 李慧淳(2015) 79頁。
- <sup>61</sup> 洪翰周『智水拈筆』 卷6、(亜世亜文化社、1984) 347-348頁。「近世嶺人士、動輒使節祀廟、而槩印文集。是皆郷先輩也、非盡舉 世知名之流也。其計出於不欲失士大夫名称、而自以家勢寒賤、既不得朝廷之科宦、即實難保有門族、號令郷里、區別於編戶、故也。於是、就其祖先中、稍稍謹愿粗辨『亥』『豕』者、掇拾平日詩句若書牘、付之劂副、名曰『某先生遺稿』」
- <sup>62</sup> 『情一堂遺稿』 韓国学中央研究院韓国学図書館所蔵 <https://lib.aks.ac.kr/#/search/detail/114217> (2023年10月28日閲覧)。
- <sup>63</sup> 朴茂瑛(2008a)。
- <sup>64</sup> 崔然美(2000) によれば、情一堂の詩を読んだ李直輔が彼女の詩を褒め称えた。その話を聞いた情一堂は、以後自分の著作を一切人に見せなかったという。

(2023年11月1日受理)